

令和3年度 兵庫県立和田山特別支援学校 学校評価〔自己評価〕

重点課題

1 児童生徒の主体的、対話的で深い学びを促す指導の工夫	2 連続性のある多様な学びの場における教育の充実	3 チームで取り組む一貫した相談・支援体制の推進
4 卒業後に自分らしい生き方を実現できるキャリア教育の充実	5 学校と寄宿舎の連携による指導の充実	6 教職員の学びの継続による専門性の確保と継承

評価	4：目標は十分達成されている	3：目標は概ね達成されている
	2：目標はあまり達成されていない	1：目標はまったく達成されていない
判定	A：良好（評価平均3.5以上）	B：概ね良好だが一層の取組が必要（評価平均3.0以上）
	C：取組に相当の工夫が必要（評価平均2.0以上）	D：取組の見直しが必要（評価平均2.0未満）

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価平均	判定	課題と改善点(来年度に向けて)
小学部	個の特性に応じつつ、グループでの共同的な学習を促す	1	児童グループの発達段階に合わせた学習内容や指導方法の改善に努める。	イラストや写真などの予定表を用いたことで、朝の会や終わりの会の司会を務められる児童が増えた。また、習慣化により着替えやトイレ、授業の準備・片付けなどに自ら取り組む児童が増えた。	3.4	B	・「主体的」と言える児童の姿を具体的にし、指導・支援の在り方を検討する。
	児童の主体的な参加を促す授業づくりを研究する	6	日々の振り返りやテーマ研究を通して、教員集団での授業研究を進める。	・学部研修として「KIDS乳幼児発達スクール」による担当児童のアセスメントを行った。児童の発達年齢を知るのに有効であった一方、活動に活かす工夫が不十分であった。 ・児童に、友達を活動に誘うことや友達と手をつなぐことを促し、友達との関わりを意識させることができた	3.3	B	・一般的な発達段階や児童の発達課題についての研修を行うことにより、グループ編成や活動の工夫に活かす。
中学部	日々の学習において、主体的、対話的で深い学びを意識した授業づくりをする。	1	「なぜ?」「どうして?」という問題提起をし、グループ、ペア学習などの協働活動や体験活動を通して、自ら考え解決しようとする授業展開を行う。 ・選択肢などの、考える手掛かりをしっかりと準備する。	グループ学習やペア学習といった小集団での学習を進める中で、各集団の話し合いの内容に合わせて、教師が問題提起をしたり解決の手掛かりを示したりすることで、自ら考え解決しようとする生徒の姿勢を促すことができた。 授業後、教師間で振り返りをしてより適切な指導や支援について話し合い、それを基にして授業改善を行うことができた。	3.4	B	生徒の実態に即した授業形態や授業展開などを教師間で日々検討・振り返りを行うことにより、さらに主体的、対話的で深い学びにつながるよう授業改善に努める。
	自己肯定感を高め、他者を認められるよう指導・支援を行う。	4	・学校生活を通して、自己及び他者の個性を尊重し、認め合う機会を設ける。 ・結果のみでなく、取組過程を含め、活動全体を通して生徒を認め、評価する。	グループ学習やペア学習を取り入れて意見を出しやすい環境を作ることで、自己の意見を積極的に発表したり、他者の意見をしっかりと聞いて受け入れたりする機会を設けることができた。 授業の振り返りなどで、思考の過程を含め生徒の学習活動全般を評価することで、「認められた」という自己肯定感を高める指導・支援を行うことができた。	3.4	B	日々の学習活動や日常生活の中で、生徒同士や教師との多様な関わりがもてる場を意識して設定し実践することにより、他者を認め、自己肯定感を高める指導・支援の充実を図る。
高等部	生徒の実態に差がある集団において、主体的、対話的で深い学びを目指す授業作りを行う。	1	学年やクラスを越えた教師間でも生徒の情報共有し、集団授業の良さを生かしながら実態に合わせた指導・支援ができるようにする。	学年集団での学習機会を多く設けたことにより、生徒たちの仲間意識が高まった。学年の担任団で、各生徒の情報共有したり日ごころから様々な生徒にかかわるようにしたりすることで、一人ひとりが主体的に取り組め、また対話的な授業が展開できるように工夫しながら授業を行うことができた。	3.4	B	研究授業以外の普段の授業については、学年やクラスを越えて授業の振り返りや意見交換を行う機会が少なかった。他学年の授業を見る機会もなかなか無いため、工夫のアイデアや様々な支援方法を学ぶ機会を作ることが必要である。日々の授業実践の中で、教師が互いに学べるような形を作っていきたい。
	自己肯定感を高め、自分らしく生きる力を育てる。	4	達成感ややりがい味わえるような工夫をし、各生徒の良い部分を伸ばす意識を持って指導・支援を行う。	生徒が一人で取り組める工夫や実態に合わせた課題の設定、繰り返しの学習等を行うことで、成功体験を積ませたり自信を持たせたりし、卒業後の自立に向けて必要な力を育てることができた。	3.5	A	卒業後の生活に汎化できる実践的な力を育てるため、教室の中の授業場面で付けた力を実際の場面でも生かすための取り組みを計画し実践したい。
総務部	各分掌と連携し学校運営の企画・調整を行い、重点課題達成の下支えをする。	1・2・4・5	各分掌と連携し感染症対応ガイドラインの改訂や情報発信、新型コロナウイルスの感染状況や感染防止対策に留意した行事計画の調整・立案を行う。	政府分科会や県による対応方針の見直しに合わせて、本校ガイドラインの改訂やコロナ対策の物品等のとりまとめ、感染状況に応じた調整や変更・行事の立案を行った。また、保護者に来校機会が確保しにくい状況からブログをこまめに更新し、子どもたちの学習の様子を発信した。	3.6	A	次年度も感染状況を踏まえた感染症対策や調整が必要となると考えられる。引き続き、感染症対策及びガイドラインの修正・改定を継続したい。
	災害から自らの生命を守るため主体的に行動する実践的な防災教育の推進。	6	ウイズコロナを踏まえた防災学習の再構築及び防災マニュアルの改訂と防災教育全体計画の立案をする。	国や県の動向や防災教育の新しい流れを踏まえた防災教育の全体計画の立案ができた。また、アサヒネット協会減災教育プログラムに参加し、保護者と協働した防災体験プログラムが実施できた。高等部の家庭科で教科等横断的な防災教育のモデルケースをつくることができた。	3.5	A	次年度は行事だけではなく、教科等横断的な防災教育が各学部で実践できるよう防災教育を推進したい。
教務部	小学部～高等部の学びの連続性を意識できる機会を設ける。	1・2・6	・年2回教科担当者会を実施し、各教科の担当者間での学習状況や課題等の情報共有を推進する。 ・各教科から出た課題については、学部や各部、委員会等、関係部署と連携しながら改善に向けて検討する。 ・小・中・高の学びの連続性や指導の工夫については共有しながら教職員の資質向上につなげる。	・小学部～高等部の教科担当者間で各学部の指導内容、課題、指導上の工夫等について共有することができ、系統的・発展的な指導を意識するきっかけを作ることができた。また、教職員の資質向上につなげることができた。 ・各教科担当者会から出てきた課題については、記録を元に教務部で把握し、必要に応じて各部署と連携しながら改善に向けて検討することができた。	3.3	B	会議の設定時間が短かったため、小学部～高等部の実践を共有するだけで終わってしまったグループがあった。学部間の学習の積み上げができていないか、系統的、発展的な取り組みになっているかのチェックを行うため、学習指導要領の各教科の目標と内容の配布をしたが、チェックや検討までは時間の都合もあり、できていない。短時間でも効率よく確認できる工夫が必要である。
	特別活動を中心としたキャリア教育を推進する。	1・4	・キャリア教育推進委員会を中心にして、キャリアパスポートを活用した取り組みの充実を図る。 ・児童生徒が自らの学習状況やキャリアの形成を見通したり振り返ったりして、自己評価を行いながら、自己実現につなげられるように推進する。	学校全体で、キャリア発達段階表やキャリアパスポートを活用した取り組みを充実させることができるよう、その目的や具体的な活用方法等について情報を共有しながら実施することができた。また、キャリア教育推進委員会では、各学部の成果や課題を共有し、課題については学校全体で情報を共有することで改善を図ることができた。	3.1	B	キャリア発達段階表やキャリアパスポートの目的や記入時期等について十分に周知できていないところがあったため、年度途中で改めて共有した。キャリア発達段階表の記入時期については、2月～3月に次年度の目標設定に反映させられるよう、作成することとしているため、十分に情報を共有しながら活用、作成を推進する。
生活安全部	児童生徒の主体的、対話的な活動を通して、自主性や社会性を育み、自治的集団を育成する。	1	・全校集会、委員会活動、児童生徒会選挙など、児童生徒が主体的、対話的に取り組めるように活動内容や指導体制を工夫する。	・昨年度同様に、動画を作成して各教室で視聴する形で全校集会を実施するとともに、感染状況の落ち着いた12月には、全校生が体育館で集合する従来の形で全校集会を実施することができた。また、児童生徒会選挙では、感染症対策として各教室で立候補者演説等を動画視聴し、小学部と中学部は教室で投票を行い、高等部は学年ごとの入れ替え制で体育館で投票を行うなど、学部の実態に応じて実施することができた。	3.5	A	来年度も感染症対策や、感染状況に応じた実施の方法を、調整・工夫していくことが必要である。全校集会は、従来の体育館での実施を基本に、状況に応じてリモートでの実施にも対応できるように準備していきたい。
	いじめの未然防止、いじめの早期発見に努め、迅速かつ適切に対応する。	3・6	・いじめ防止推進委員会を中心に教職員間で情報を共有し、必要な外部の関係機関とも連携を取りながら対応していく。 ・増加するネットいじめにも対応できるよう、教職員の指導力向上を目的とした研修を実施する。	・年3回のアンケート実施により、いじめに関する情報を収集し、いじめ防止推進委員会や職員会議を通じて職員間で情報共有を行った。また、担任、学年、学部、舎との連携を深め、いじめにつながる可能性のある事案についても、早期に情報共有を図ることができた。 ・警察に勤務されていて本校の実情にも詳しい保護者の方を講師として、希望する生徒、保護者、本校教職員を対象に、ネット・スマホ安全教室を実施することができた。	3.4	B	本校においてもSNSに関連したトラブルが増加しており、ネットいじめの未然防止を含め、早期の状況把握や対応が必要になってきている。来年度もネット・スマホ安全教室等の研修を計画し、ネットトラブルやネットいじめにも対応できるよう教職員の指導力の向上に繋げていきたい。
	児童生徒の心身の健康を保持、促進する。	3・6	・家庭と連携を取って、日々の健康観察を丁寧に行う。 ・スクールカウンセラーと連携を取り、児童生徒のカウンセリングや、カウンセリングに関する教職員、保護者への助言及び援助を行う。また、カウンセリングマインド研修を実施して、教職員の指導力の向上を図る。	・昨年度より継続して、1日3回の検温、健康観察表への記入、全クラスへの養護教諭によるチェックを行い、年間を通して細やかな健康観察を実施した。 ・スクールカウンセラーと児童生徒の様子等について細やかな情報共有を行い、児童生徒のスクールカウンセリングや、教職員への助言及び援助を、年間12回実施した。また、8月と1月の年2回、全教職員を対象にカウンセリングマインド研修を実施した。	3.5	A	来年度も引き続き感染症対策を実施し、細やかな健康観察を行うとともに、スクールカウンセラーや外部諸機関との連携をより深めて、児童生徒の心身の健康を保持していきたい。また、スクールカウンセリングについて、多くの児童生徒がスクールカウンセラーについて知ることができるよう実施の方法を工夫し、より一層スクールカウンセリングを充実させていきたい。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価平均	判定	課題と改善点(来年度に向けて)
進路指導部	高等部卒業後の相談・支援体制を整備する。	3	福祉・労働部門の関係機関と、保護者・本人、学校が連携し、進路相談会と移行支援会議を実施して、各機関の役割分担を決定する。	年度初めの進路相談会において、各関係機関と該当生徒の進路指導の方向性を共有することにより、必要な情報を収集し、進路指導を円滑に進めることができた。卒業後の支援体制を共有することを目的に移行支援会議においても年度内の関係機関との連携があることから、それぞれの役割分担が明確にでき、卒業後の支援体制を充実させることが望める。またコロナ禍における会議の実施が困難な場合があったが、外部機関の協力でリモートでの実施ができた。	3.3	B	本校に入学、転入してくる時点で福祉や関係機関とつながりのない家庭があることから、進路指導部として家庭への情報発信や福祉や関係機関とのつながりを促していく必要がある。また、来年度は校内の連携として、特に支援研修部との連携をより深めるために進路相談会や移行支援会議への協力を求めて、支援研修部が持つ関係機関との校内外の支援体制を家庭支援や進路先においても有効に活用し、より一層の卒業後の支援体制を充実させたい。さらに、進路相談会や移行支援会議のリモート化についてもコロナ禍におけるニーズがあり、検討していきたい。
	キャリア発達を促し、卒業後についての理解を深める。	4	進路希望調査等を活用し、保護者との連携を深めると共に、児童生徒自身の思いを明確にしなが、現場実習を計画・実施し、卒業後に自分らしく生きていくための理解を深めていく。	進路希望調査を基に、保護者や生徒本人の要望に沿って現場実習や進路決定につなぐことができた。保護者や生徒との日頃の関わりや関係性を基に、各担当が中心となって必要な聞き取りや説明を丁寧実施したことが生徒自らが、進路についての考えを積み上げることに繋がっている。また高等部2年生で就労アセスメントを行うことで、就労に向けた自分の得手不得手をより明確にでき、卒業後への方向性をより深く考察することができた。さらに、校内での就労アセスメントを初めて実施した。	3.3	B	次年度も継続して進路希望調査を実施し、各家庭からの要望を収集したい。その中で、各家庭や本人に必要な情報を伝えながら、卒業後のイメージを明確にできるようにしたい。コロナ禍において現場実習等が実施できない状況も予想されるため、現場実習の実施期間を柔軟に設定したり、必要に応じて校内の関係分掌間で調整を行ったりして、進路指導を充実させたい。また、現場実習の受け入れが厳しい現状があるため、開拓業務を継続して実施し、協力いただける事業所を増やしていく必要がある。また校内での就労アセスメントについて検討、研修を進める必要がある。
支援研修部	校内外の人的資源を有効活用し、個々の実態や特性に応じた指導を充実させて一貫した支援を行う(校内支援)相談・支援体制を充実させる(地域支援)	2	「個別的教育支援計画」や日常の支援について、学部や養護教諭、寄宿舎指導員及び外部人材と情報を共有したり担当者へ指導技法の習得・指導技術の向上のための助言をしつながら協働して児童生徒の支援にあたる。	個別的教育支援計画については、全校生分を支援研修部専任が目を通して一部助言を行った。児童生徒の心身の健康面について養護教諭と情報共有し、てんかん発作や心の状態を把握した。あまりハ「巡回相談・指導」を活用し、各学部・寄宿舎指導員と共同で児童生徒への指導技術・介助技術の習得・向上をはかり児童生徒の支援にあたる。	3.5	A	個別的教育支援計画書式統一に向けて準備を整えたり、課題設定に至るカテゴリーを整理する必要がある。児童生徒の実態把握・課題の整理・目標の設定等がより適切に行えるように実態把握研修・事例研修等を行うとともに作成手順の定着・習熟をはかる。肢体不自由児童生徒への指導技術・介助技術の一層の向上が課題である。あまりハ「巡回相談・指導」をより有効に活用するために、各児童生徒担任と寄宿舎指導員の情報共有をはかる。実技研修(ボバースコンセプトに基づくアプローチ・動作法・FBM等)の実施による指導技術・介助技術の習得・向上をはかる。
	新学習指導要領にのったテーマ研究を推進し、職員の専門性向上のための研修を実施する(研修)	1	「主体的・対話的で深い学び」について理解を深化させて学習指導案を作成しつつ、それらを踏まえて授業改善を推進する。	年度初めに日々の授業や研究の手掛かりになる経験談を全体に伝えた。全体を学部学年などのグループにわけ、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を置き、子どもへの関わり方や教材の仕掛け、授業の組立について模索した。その具体的な方法を学習指導案に表記でき、研究授業を行った。授業者の疑問点などテーマに添った検討会を行えた。	3.0	B	次年度の研究テーマについて、今年度のテーマを継続し深めていくのか、新しいテーマを掲げるのかを慎重に判断する必要がある。また、ここ数年は研究授業を中心に研究活動を進めてきているが、そのスタイルや運営の効率化について検討が必要である。次年度の研究テーマを発展・深化させるのか、新しいテーマに取り組むのかについてアンケートを実施しニーズの確認を行う。研究スタイルについては、実態把握や事例検討を組み合わせたり、設定の研究テーマに応じて取り組むグループを設定したりする。
		6	デジタルコンテンツを用いた研修が受けられるように、「学びラボ」のシステムを構築し、運営する。	6月にデジタルコンテンツの「学びラボ」を導入した。10月に実施したアンケート結果では利用したことがあると答えた人が19%であった。利用したという人の満足度は88%であった。利用してみたいと思う方は64%であったが、視聴する時間がなかったという意見が58%であった。	3.4	B	年度途中で導入したことから周知がうまくできなかった。次年度は年度当初から環境を整えて啓発していきたい。また、コンテンツの更新があった場合は速やかに掲示板で周知したり、Hand In Handで紹介欄を作るなどして情報発信を継続して行いたい。また、年度当初に行う新転任者研修において、基本的な知識が学べる場として「学びラボ」を紹介し、活用を提案していきたい。
舎務部	卒業後の生活を見通した社会性、身辺自立、生活力の向上	5	コミュニケーション力等の社会性や身辺自立力、生活力の向上を目指し、学部・保護者との連携を密にし、障害特性・心理・背景、課題などの実態に応じた支援方法の検討と、情報の共有を図る。	保護者、担任、指導員同士の連携を大切にしたので、様々な角度からの舎生の情報を共有することができた。そのことでタイムリーな支援・指導につなげることができた。	3.4	B	保護者に対しては連絡帳で、担任とは連絡事項記入用紙を通じて、またどちらに対しても送迎の際に直接会話を通して情報の共有を図る。年度初めに担当者・グループを写真入りで紹介し、いつでもだれでも連絡がもらえるようにする。
	寄宿舎指導員としての実践力と専門性の向上	6	様々な場面での課題や人権を大切に支援方法の検討、および実践例等の研修を行い、専門性と指導力の向上を図る。	日々の引継ぎや情報交換会など、様々な場面で情報共有や研修を行い、舎生の思いに寄り添いながらチーム寄宿舎としての支援・指導を行う中で専門性と指導力を向上させることができた。	3.2	B	引継ぎ時の舎生の様子とその対応の報告、グループ会と報告会、研修などを通してさらに専門性の向上に努める。寄宿舎指導員の人材確保のため、県に当局に対して採用試験再開を強く求めていく。
事務部	事務室職員が教員との連携を図り、学校運営に参画することにより、組織的な学校運営が促進され、学校の総合力を向上させることが期待できる。	1	①就学奨励費など児童生徒に関する事務処理において知り得た情報で、教員と共有すべき内容のものを迅速に提供する。 ②給与(手当)・休暇制度の改定、また福利厚生事業の実施など、その都度、職員へタイムリーに連絡していく。	左欄に記載した取組目標については、概ね達成できている。児童生徒に関する情報で教育活動に関するものは、共有し、また、給与改定、休暇制度改定、福利厚生事業の実施など職員に関わる情報については、県教委等から通達後、タイムリーに提供できた。文科省の提唱する「チーム学校」の理念にもあるように事務室が学校運営に積極的に参画することで、組織的な学校運営が促進され、学校の総合力が向上する。事務室の学校運営への参画は、近年、芽生えた重要課題であり、更にこの取組を進めていきたい。	3.5	A	【課題】事務室の学校運営への参画は近年提唱された新しい課題であり、事務職員自身の意識改革が必要である。 【改善点】法的見地からの対応等事務職員の専門性を活かした提案や情報提供にさらに努めていく必要がある。
	児童生徒、教職員が安心して学校生活を過ごせるための環境整備に努める。	4	施設・設備の老朽化への対応、防災、感染症への対応、不審者侵入への対応などの環境整備(必要物品の購入を含む。)に努める。	建物、設備、備品等が経年使用の中で劣化し、修理、買替えの時期が到来しているものがあり、また、児童生徒の障害種に対応した環境整備として次の対応を行った。今後も、施設設備、教育環境、社会環境、予算の状況等に十分留意し、適切に更新整備を進めていきたいと考えている。 (1)R3.1～3月実績 教室・厨房エアコン修理、スクールバス自動ドア修理、乾燥機ヒーターユニット修理、地下ビット蒸気漏れ修繕、南校舎鏡修理、物置基礎コンクリート工事、雨よけシート交換工事、寄宿舎2階トイレ小便器・照明非接触化工事、入出力支援装置(アイトラッカー、みやすくスタンド、ボタンマウス)購入、iMacデスクトップパソコン購入、大判プリンター購入、エアコン2台購入、プロジェクター購入 (2)R3.4～1月実績 エアコン取付工事、業務用冷凍冷蔵庫購入、生物顕微鏡購入、物置設置工事、コロナウイルス感染症対策用品購入、サーマルカメラ購入、教職員公舎解体工事、寄宿舎棟1階トイレ改修工事、換気扇取替工事、寄宿舎職員室入り口ドア・雨樋修繕、電気室改修工事、教室エアコン修理、会議室クロス張り替え工事、放流ポンプ槽プロトスイッチ取替工事、吸収式冷温水器修理工事 (3)今後予定 エアコン3台購入、北公舎・体育館トイレ鍵付きアコーデオンカーテン設置工事、非常通路修繕工事、Nas購入、プレーカー交換工事、IP電話切替工事、自立活動棟・南校舎トイレ改修工事、寄宿舎浴室特殊浴槽設置工事	3.4	B	【課題】施設の整備には多額の経費を必要とする場合が多く、昨今の県財政の厳しい状況の中、限られた予算で適切に整備を進めることが非常に困難な状況となっている。また、今年度は新型コロナウイルスへの対応や、その影響による部品納入の遅れ、品不足が発生し、工期や納期の遅延等が見られた。 【改善点】安全安心な学校環境の実現に向けて、全職員がその意識を持ち、施設設備の状況について留意し、危険箇所改善提案等を行うことが重要である。また事務室担当者は予算確保について県財政当局への要望を的確に行っていく必要がある。

【学校関係者評価】
様子を、学校通信や屋外活動を通りが見せて頂いています。先生方が生徒の方に対し、一生懸命に関わっておられる姿を拝見し、よく頑張っておられ、大変評価できると、いつも感じています。日頃の先生方や保護者の方々の取組を感じることができました。コロナ禍により、障害者雇用はさらに厳しくなっており、我が子も困難に直面しています。リモート化や様々な取組の中で、実現していければ良いと願っています。コロナ禍において、和田山特別支援学校の教職員の皆様への対応は大変だったと思います。世の中では様々な情報が錯綜しておりますが、今後も「正しく恐れる」ことで、対応していただけますよう、お願いいたします。保護者アンケート結果、拝見しました。いずれも高い評価で教職員の皆様が一生涯懸命に児童生徒のことを考えて、行動されていることがわかります。ありがとうございます。自己評価の課題と改善点において、高等部の上段に「日々の授業実践の中で、教師が互いに学べるような形を作っていく」とありましたが、これはカリキュラム・マネジメントに関わる部分だと考えます。今後も各学部内、もしくは学部を越えてこのような協働がより図られることを期待しています。一方で保護者アンケートで見ると、質問項目8や9「わからない」という回答が一定あります。貴校では「なごみ」をはじめとした充実したPR活動がすでに行われていますので、なぜこのような結果となったのか、私には推察が難しいところなのですが、その部分についての情報収集や分析をしていただき、今後のPR活動につなげていただければ幸いです。計画目標に対して非常によくやっておられ、頭の下がる思いがします。「重点課題についての目標」が前回とおなじなのか、新しいものなのか、判定Aをもって、取り敢えず目標達成とするのか、さらに継続するのか、また「課題と改善点(来年度に向けて)」も来年度にどう展開されたのかがこの表だけではよくわかりません。学校評価は先生方の子供達へ様々な面から関わって頂いている事がわかり有難く思います。保護者アンケートでは、学習環境の整備について少し低く感じますが、県の予算のこともあります。今後ともより良い学習環境を目指して頂きたいと思っております。今年度感じたことは、学校に入る時ノーチェックで入れように思います。玄関で顔チェックされているのであれば良いですが。